

太平洋戦争—インパール(ウ号作戦)第三部

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

(「ウマ」高地攻撃)

「ヤギ」高地戦闘にて、長家第二大隊長が戦死し、其の後我が攻撃の氣勢頓挫の状態であったので、宮崎少将は四月七日朝、当時唯一の予備隊であった歩五十八の第五中隊長を「ヤギ」高地山頂に招致して「ウマ」高地の中間攻撃を命じた。

同山頂で直接中隊長に、詳細に敵情地形を説明し、この攻撃の具体的手段方法を問答して良く会得せしめ、同中隊長は攻撃実施前、分隊長以上の幹部を集め、よく現地を指示して、敵情地形を説明し中隊長の攻撃方法を徹底させた。同中隊は第二機関銃中隊協力の下に、午後二時から恰も平時の演習のように実に整々堂々とした攻撃を実施し、一時間足らずで「ウマ」高地を完全に奪取した。然し本戦闘で中隊長以下二十数名を失った。本攻撃に関する中隊長の攻撃命令は実に明快適切な、立派で積極的なものであった。

本攻撃が成功するや、歩五十八本部は機を失せず、本高地に進出して爾後永くここに位置して至難な攻撃を直接指揮した。コヒマ附近の攻防戦は六月初旬、同地撤退まで二ヶ月間、連日さきのサンジャックの戦闘に幾倍、幾十倍するかと思われる苛烈極まる全く死闘に死闘を重ねる戦闘となった。

(「ネコ」高地の夜襲)

「ネコ」高地の重要性に鑑み、之を、夜襲を以って奪取する為、歩五十八第一大隊の駄牛部隊としてコヒマに追及して来た新鋭第四中隊(長、山村中尉)を使用することに決した。

直ちに同中隊長に詳細な夜襲実施の方法を教示した。山村中隊長は更に綿密に研究し、準備を周到にして、愈々四月十八日、日没後夜襲を実施した。中隊長以下の奮闘により事に夜襲は成功したが、中隊長以下数十名の死傷者があった。

ところが翌十九日払暁になり、ジョセマ附近の敵砲兵と敵機の為、空陸から猛烈なる砲爆撃を蒙り一瞬にして同中隊附近は爆煙のため何物も見えなくなった。其の結果、満足なる者は大和田曹長以下僅か十五名となり、他は悉く死傷した。如何に敵の砲爆撃が猛烈でも、余りにも損害が多いので調査してみると「ネコ」高地は全く岩石の山で殆ど工事が出来なかった為であった。奪取後払暁まで身を隠すに足る工事が出来なければ、夜襲そのものが成功しても爾後確保出来ないのである。

僅か十五名では永く同高地を確保することは出来ず、十九日、日没後恨みを呑んで司令部高地に撤退させた。

(敵砲兵とわが友軍飛行機の来援)

日本軍に砲兵及び飛行機の協力が無いのを察知した敵砲兵は実に傍若無人に陣地を占領していた。ジョセマ附近の我が方緩斜面に完全暴露して横一列に二十五門宛、前後縦深に四列、合計百門の砲を展覧会のような砲列を敷き、実に驚嘆すべき猛砲撃をわが歩五十八や司令部高地に実施し、戦闘初期は概ね隔日毎に、中期以後は毎日正午前後に約三十分間実施していた。

三叉路高地は、最初緑のジャングルで遠く通視を許さなかったが、大砲撃が度重なるに従い砲撃の為、樹木が漸次吹っ飛んで戦闘一ヶ月後には一本の樹木もない奇麗な禿山の耕地と化してしまった。

然し、十分掩壕を掘って其の中に居れば、直撃弾以外殆んど損害はなかった。戦場慣れた我が歩五十八の将兵は、よくこの呼吸を承知していて、敵の大砲撃が始まらんとするや、「それスコール（激しい局地的なにわか雨）が来るぞ」と言って素早く掩壕内に飛び込むのであった。

四月二十七日午後二時頃、作戦開始以来、初めて日本軍戦闘機六機が東南方から飛来、ジョセマ附近の敵砲兵陣地を實に見事な急降下をして、六回に亘り反覆攻撃を実施した。遂次六機が急降下するや、次々に敵砲兵陣地は爆撃され空中高く飛散する実状が手に取るように望見され、痛快の極みであった。

到底自身では動き得ない野戦病院入院中の重傷患者ですら、いつの間にか外に飛び出して「万歳」を絶叫していた。

(敵戦車のわが後方突破侵入と歩兵団司令部の戦闘)

五月四日午後二時頃、突如敵戦車三輛が我が歩兵団司令部右側背の本道上に現われ、背後から戦車砲を以って司令部を猛射した。距離は百ないし百五十メートル位であった。

四月下旬以来、敵戦車は遂次猛威を発揮し始め、毎日デマブール方向から三叉路高地北側で戦闘中の第三大隊を攻撃していたが、大隊は道路を阻絶したり、落とし穴を作ったり又、肉迫攻撃をしたり、あらゆる考案を尽くしてこれと対戦していた。ところが、この四日は遂に敵戦車隊が大隊を突破し、更に勢いに乗じて三叉路高地東側の本道上を突進し、歩五十八本部の後方を突破、遂に司令部の後方迄やって来た。

司令部では早晚覚悟をして居たので、宮崎少将以下全員それぞれ予め定められた任務につき応戦した。そして我が将兵の奮戦によって三台の内二台を完全に攔控させ、その戦車

内から印刷したばかりの真新しい二万分の一の地図や時計、各種自動火器、磁針器等貴重なものを多数鹵獲した。此の新地図を入手して、始めてコヒマ附近の詳細な地形や道路などが判明した。

(第一大隊を歩五十八主力方面に招致)

戦局を大観すると、四月五日夜コヒマ占領後約二週間位から敵の反攻漸次活気を呈し、四月末頃には既に攻守所を代えた形となり、更に五月上旬に及び敵の反攻愈々熾烈を極めるに到り、本情況に於いてジョセマ附近にある第一大隊主力は戦術的には今や大なる効果なく、戦況の逼迫に伴い、これとの補給連絡が愈々困難となり師団長の許可を得て、五月七日これを撤退させて最初歩兵団長の予備隊とし、数日後山砲兵大隊と交代して左翼第一線に配置した。

(敵歩兵の攻撃法)

敵歩兵は決して歩兵単独では攻撃してこず、必ず猛烈なる砲爆撃の援護下、或いは煙幕や戦車に支援されて前進して来るのが常で、敵の砲爆撃が止むか、煙幕が薄らいだと思った其の時既に、敵歩兵は手榴弾の投擲距離内まで接近しており、盛んに手榴弾を投擲して、我が軍に恰も撤退を強要するかに見えた。然して一度も銃剣突撃をして来たことはなかった。

歩五十八の将兵はこの呼吸をよく呑みこんで沈着に頑強な応戦をすると、敵は再び優勢なる砲撃、煙幕、戦車等に掩護されて後退するのが常であった。又、敵は夜間には絶対に攻撃して来なかった。

(歩五十八の闘魂)

三叉路高地の攻撃に関しては、歩五十八は実に精魂を尽くし、各方面とも連日連夜各種の工夫をこらして攻撃を敢行したが、遂次将兵を損耗するだけで容易に奪取することが出来なかったが、それでも将兵の闘魂は尚烈々たるものがあつた。

五月に入る頃には第二大隊の各中隊の戦闘員は平均三十名未滿となり、最も少ない中隊は軍曹以下十二名で、その十二名の中隊が或る日「今夜は中隊長の命日であるから中隊独力で本夜半夜襲を決行し、亡き中隊長の仇を討ちたい」と福永聯隊長に強硬な意見具申をして来た。剛腹な佐藤師団長もこれを聞かれて大いに感動され「斯くの如き中隊あるは、我が師団否全日本軍の誇りである」と激賞された。終戦後コヒマ作戦に英軍の中隊長として参戦したインセン（ラングーン郊外）收容所長は歩五十八の如く闘魂烈々として強靱勇敢なる軍隊は過去に於いて見聞したことがないと賞賛していた。

(アラズラ高地線に後退と雨季の到来)

彼我の戦線錯綜し、全線危急に瀕しつつあるので師団長から五月十二日、右攻撃隊（長、白石山砲兵隊長、歩一三八、歩五十八台三台隊、歩一二四第三大隊、山砲兵聯隊主力を主

体)を以ってコヒマ西側高地線を、左攻撃隊(長、宮崎少将、歩五十八主力、歩一二四主力を主体)を以ってアラズラ高地線に後退を命ぜられた。

当時我が第一線、特に三叉路高地の第一線は、至近距離で彼我の戦線入乱れ、或る部分では完全に敵に包囲されていて、一見到底離脱など不可能かと憂慮されていたが、敵は夜間全く逼塞して積極的行動を取らないので、我が軍は死傷者の処置、兵器弾薬糧秣に至るまで万全を果して、翌払暁までに所命の地点に兵力を集結することが出来た。

この頃敵は、漸次増加し、少なくとも吾に比し三倍以上の兵力を擁していたものと思われた。あのアラズラ高地の新陣地線にて、一ヶ月間悪戦苦闘が継続されたが、歩五十八は寸土と雖も敵に委ねはさせなかった。

この新陣地に着いた頃は、既に連日降雨で愈々雨季の到来を思わせ、蝸壺内で一寸居眠りしている間に、豪雨の為腰以下水浸しになって居たこともあった。

(第三十一師団主力の転用と宮崎支隊)

我が第十五軍は、本作戦発起後、約一ヶ月でインパールを攻略する予定であったが、各師団の奮闘にもかかわらず、五月下旬になってもなおインパールの敵は頑強に抵抗するのみならず、雨季の到来、我が死傷の増加、後方補給の至難、敵兵の増加等むしろ我に不利なる材料のみ多く、このまま推移すれば到底作戦目的達成の見込みはない状態に陥った。

そこで軍としてはコヒマ附近の第三十一師団主力を速やかにウクルル附近に転用し、爾後これを第十五師団と第三十三師団との中間地区に投入してインパール攻略の最後のベストを尽くそうとした。

軍の企画に基づき、第三十一師団主力は、六月二日頃から後退行動を開始し、宮崎支隊は六月四日から其の任務(第三十一師団主力の転進を掩護し、爾後主としてコヒマ～インパール道を遮断し当面の敵を拒止する)に基づき行動を発起した。

茲に於いて、二ヶ月間死闘を重ねたコヒマ攻防戦は終わりを告げ、爾後宮崎支隊は、更に一ヶ月余り死闘が続き、歩五十八からは、第一中隊(七十名)と第五中隊(三十名)の二個中隊が参加した。両中隊は従来 of 戦闘振りを発揮して健闘した。

「新発田聯隊史」より